

「国語総合」の指導と評価の工夫

第1集

後編

単元の指導と評価の事例（B 書くこと）

- 1 単元名
意見文を書く（3時間）
- 2 本単元のねらいと「年間の指導と評価の計画」上の位置付け
本単元では、意見文の書き方について学ばせ、書くことに関心を持たせ、また、実際に書くことでその技能も身に付けさせることをねらいとしている。更に、自己や社会を鋭く見つめ、問題をとらえていく姿勢も養う。
「年間の指導と評価の計画」の中では、「書くこと」の領域として、5月に「手紙文」を3時間、9月に「報告文」を5時間学習済みである。「手紙文」で身に付けた「相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書く」（学習指導要領の内容・B「書くこと」ア）力を生かし、「報告文」で身に付けた「論理的な構成を工夫して、自分の考えを文章にまとめる」（学習指導要領の内容・B「書くこと」イ）力を復習し、更に発展させるために位置付けている。
また、「話すこと・聞くこと」の領域では、本時の直前に「討論する」を3時間学習し、「課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重して話し合う」（学習指導要領の内容・A「話すこと・聞くこと」ウ）力を培っており、その発展としての位置付けでもある。なお事前に、「討論する」で関心を持った話題別などに、グループ分けしておくものとする。
更に、本単元で身に付けた論理的な思考力とそれを効果的に伝える力を踏まえ、「書くこと」の領域では1月の「記録文」、「話すこと・聞くこと」の領域では3月の「課題の解決のために話し合う」の学習に体系的につなげていくものとする。
なお、本単元は3時間の設定になっている。しかし、2・3時間目は学習活動の関連性が深い。また、生徒の学習の進行状況にも個人差が出るものと思われる。よって、2・3時間目は一つの大きな枠としてとらえ、流動的に個別に対応していきたい。
- 3 単元の目標
 - ① 自分の考えを持ちながら書く工夫をする。（関心・意欲・態度）
 - ② 自分の考えをまとめ、それを相手に効果的に伝える。（書く能力）
 - ③ 正しく語句を選ぶことの重要性を理解する。（知識・理解）
- 4 単元の評価規準
 - ① 意見文の目的を理解し、思いつきや感想にとどまらない文章を書こうとしている。（関心・意欲・態度）
 - ② 根拠を明確にし、筋道だった意見を書いている。（書く能力）
 - ③ 自分の意見を効果的に伝えるための語句の使い方を身に付けている。（知識・理解）
- 5 指導と評価の計画

時	各時間の目標	単元の評価規準	評価方法	学習活動
1	○意見文を書くために様々な意見を出し合う。	①（関心・意欲・態度）	行動の観察 ワークシートの記述の	○前単元（討論する）で関心を持った話題について、グループで意見を出し合いながら、問題点を考察する。 ○自分の意見を定める。 ○自分の意見の根拠、自分とは異なる意見に対する反論を考え、

ボランティア活動の単位認定について

自分の意見
反対。

自分の意見の根拠

自分の意志で行うもので、強いられては意味がない。
受ける側にも迷惑。
単位という見返りも変。

反論に対する反論

自分とは違う意見
この経験になる。
精神を学べる。世間に浸透させられる。

「自分と違う意見」に対する反論

強いられて嫌な経験になってしまってもしょうがない。
単位を餌にするのもよくない。

まとめ

自発的に行うべき。物質的利益も不要。
行く側も受ける側も満足する形がよい。

(原版のサイズはB4)

●「書く能力」
・自分とは異なる意見を効果的に用いて、意見を主張している。
・体験談や正当性のある社会現象や事件など、具体的な記述を書き込んでいる。

【Cの生徒への手だての例】
●「書く能力」
・自分の意見と自分とは異なる意見とが明確に区別できていない生徒には、不明確な点を指摘し、書き直させる。
・根拠や反論に具体性の欠ける生徒には、題材に関する資料や新聞記事を提示し、それらを参考に文章を組み立てさせる。

○推敲後の文章を提出させ、その記述を確認する。
○推敲後の文章を提出させ、その記述を確認する。

する。
◇原稿用紙に書き込みをする際、短所だけでなく、長所も指摘させる。
◇他者の意見を読み、多様な見方を学ばせる。
◇読み手に伝わりにくかった表現を改めさせる。
◆「自分の意見と自分とは異なる意見とが明確に区別でき、全体の流れに一貫性がある。」を判断のよりどころとする。
◆「自分の意見の根拠、自分と異なる意見に具体的な記述がなされている。」を判断のよりどころとする。

いたことを書き込みながら相互評価(学習プリント④)を行う。
○他者からの批評を参考に、意見文を推敲する。

☆文章構成の基本型

・三段型
序 ……文章の導入部分。序論。

破 ……中心となる内容を詳しく分析・検討する。本論。
急 ……まとめ。結論。

・四段型
起 ……文章の導入部分。序論。

承 ……「起」で提示した内容を受けて、説明・分析する。
転 ……別の視点から、問題を捉えなおす。
対比・対立する内容を提示し、それに対する反論・対策を述べて自論を強調する。

結 ……まとめ。結論。

・五段型
序論→説明→論証→列挙→結論

☆主題の位置による違い

（最初に結論を提示し、その説明や論証を展開する。）

頭括式
結論
本論
結論
尾括式
（先にくつかの事実の列挙、説明などを行い、そこから導かれる結論を述べる。）

双括式
（最初に結論を提示し、具体的な説明や論証を展開して、最後にもう一度、結論を述べる。）

(原版のサイズはB5)

7 単元全体の評価

(1) Cと評価した生徒への今後の指導の例

関心・意欲・態度	優れた文章を写させ、提出させる。
書く能力	不十分であった点を指摘し、もう一度推敲させて、提出させる。「記録文」の単元で継続して指導していく。
知識・理解	題材に関連した記事を集めさせ、接続語と意見文独特の文末表現に丸を付けて提出させる。

(2) 学習指導の成果

最初に、文章の型を提示し、段落・形式などを指定することで、普段、文章を書くことが苦手な生徒も積極的に取り組むことができた。また、どの生徒も、他者の文章に対して興味を持って読んでおり、相互評価は効果的であった。文章を書くことへの関心にもつながった。

(3) 改善の視点

文章の型を提示し、段落・形式などを指定することで、コンパクトに指導することができ、「関心・意欲・態度」を持続させるためには、非常に有効であった。しかし、生徒の実態に応じて、相互に評価し合う人数を増やすなど、時間を延長して指導することも考えられる。

また、抽象的な記述に終始している生徒も多く、体験談を入れるなどより具体的な記述を入れさせる練習を今後重ねていきたい。

(堀川 真理子・小泉 清香)

単元の指導と評価の事例 (C 読むこと)

1 単元名

俳句・川柳を読む (3時間)

2 本単元のねらいと「年間の指導と評価の計画」上の位置付け

本単元では、韻文を読み比べることによってその特徴の違いをとらえ、作品の良さをそれぞれ読み味わわせることをねらいとする。韻文独特のリズムや特徴的な表現の持つ効果を理解させ、これから生じる作品の違いや良さを味わわせたい。

「年間の指導と評価の計画」において、「読み比べ」に関しては、「読む」領域において10月に「人物に注目して読む」(8時間)「物の見方・感じ方・考え方に注目して読む」(8時間)の2単元を設定し、散文と韻文の読み比べをそれぞれ行っている。本単元では、それらを通して身に付けた「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」ウ)や「様々な文章を読んで物の見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」エ)を生かしながら、「文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりする」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」イ)を身に付ける指導を行う。学習活動では紹介文を書かせるが、「書く」領域で9月に既に学習しており、それを受けている。したがって、ここでの紹介文を書く学習は生徒に読みを深めさせるための手だてであり、書く能力の評価の対象とはしていない。

本単元で身に付けた「形式や表現上の特徴」に関する理解は次の単元「書く」領域の「身近なものの広告文を書く」に、さらに「読み比べ」については「読む」領域の「短歌・和歌を読む」「詩」を読むにつなげていくものとする。

3 単元の目標

- ① 読み取った内容に即して俳句や川柳を朗読する。(関心・意欲・態度)
- ② 作品に詠まれた人物・情景・心情などを表現の特色をとらえて読み味わう。(読む能力)
- ③ 俳句や川柳に見られる特徴や表現技法を理解する。(知識・理解)

4 単元の評価規準

- ① 読み取った内容に即して俳句や川柳を朗読しようとしている。(関心・意欲・態度)
- ② 韻文の特徴的な表現に即して作品に詠まれた人物・情景・心情などを読み取っている。(読む能力)
- ③ 俳句や川柳に見られる基本的な特徴や表現技法を理解している。(知識・理解)

5 指導と評価の計画

時	各時間の目標	単元の評価規準	評価方法	学習活動
1	○俳句と川柳の特徴を確認する。	③ (知識・理解)	ワークシート(学習プリント①)の記述の点検 発言の観察	○作品を音読し、リズムをつかむ。 ○俳句や川柳の形式を確認する。 ○俳句と川柳を比較しながら、表現の特徴、句意、情景(内容)、表現技法を整理する。 ○俳句と川柳に表現される内容の違いを確認する。

2	○紹介文を通して俳句や川柳を読み味わう。	② (読む能力)	紹介文(学習プリント⑤)の記述の確認	○紹介文を書くための俳句や川柳を確認する。 ○紹介文の書き方を確認する。 ○俳句や川柳の紹介文を書く。
3	○紹介文を読み合うことによって深めた読みを朗読に表現する。	① (関心・意欲・態度)	相互評価表(学習プリント⑥)と朗読台本(学習プリント⑦)の記述の確認	○グループごとに紹介文の相互評価を行う。 ○俳句と川柳の紹介文として良いものを一つずつ選び、グループの発表者を決める。 ○グループごとに紹介文を発表する。 ○各自が紹介文を書いた俳句と川柳から好きな作品の一つ選んで、朗読の工夫点を考える。 ○各自作品を朗読する。

※「知識・理解」については定期考査でも出題し、定着の度合いを確認する。

6 各時間の評価と指導の実際

【第1時】

学習活動	指導(◇)と評価(◆)の留意点	評価の実際
○作品を音読し、リズムをつかむ。 ○俳句や川柳の形式を確認する。 ○俳句と川柳を比較しながら、表現の特徴、句意、情景(内容)、表現技法を確認する。 ○俳句と川柳に表現される内容の違いを確認する。	◇テーマに関連のある俳句と川柳を教材として提示する。(学習プリント①) ◇繰り返し音読させることによって五・七・五のリズムをつかませる。 ◇季語の有無や切れなど俳句と川柳の基本的な表現の特徴を確認させる。 ◇作品に表現された情景(内容)を確認し、俳句と川柳の特徴を確認させる。 ◆「俳句と川柳の特徴をそれぞれ理解している。」を判断のよりどころとする。	○ワークシート(学習プリント①)を提出させ、記述内容を確認する。 ○発言の様子を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「知識・理解」俳句・川柳の特徴に気づき、教師の発問に的確に答えている。

【Cの生徒への手だての例】
●「知識・理解」特徴をつかみにくい生徒には、ワークシートを再度確認させ、理解を深めさせる。

【第2時】

学習活動	指導 (◇) と 評価 (◆) の留意点	評価の実際
○紹介文を書くための俳句や川柳を確認する。 ○紹介文の書き方を確認する。 ○紹介文を書く。	◇グループごとに指定された作品の紹介文を書くように指示する。(学習プリント②) ◇紹介する対象をクラスメートとして紹介文を書くように指示する。 ◇紹介文の展開例を示し、書き方を確認させる。(学習プリント③) ◇主な表現技法をまとめた資料を確認させる。(学習プリント④) ◇情景(内容)が思い浮かばない場合はイメージ画を書くように指示する。 ◇紹介文はそれぞれ10行以上書くように指示する。 ◆「表現に即して作品を読み味わい、文章にまとめている。」を判断のよりどころとする。	○紹介文(学習プリント⑤)を提出させ、記述内容を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「読む能力」
表現に即して読み取った内容を独自の視点で紹介文にまとめている。

【Cの生徒への手だての例】
●「読む能力」
読み取ったことを紹介文に書くことが困難な生徒には、紹介文の展開例を示し、それに従って書かせたり、書ききれなかった生徒には時間を延長して書かせたりする。

【Cの生徒への手だての例】
●「関心・意欲・態度」
朗読台本を作れない生徒には朗読の工夫を提示する。

○各自が紹介文を書いた俳句と川柳から好きな作品を一つ選んで、朗読の工夫点を考える。 ○各自作品を朗読する。	2名がする。 ◇朗読する際に特に意識して読みたい点や工夫点などをワークシートに書く。(学習プリント⑦) ◇グループごとに1名ずつ指名し、5名全員に朗読させる。 ◇朗読する際にグループ内の生徒に向かって行わせる。 ◆「作品を読み味わい、表現に即して朗読しようとしている。」を判断のよりどころとする。	○ワークシート(学習プリント⑦)を提出させ、記述内容を確認する。
--	--	----------------------------------

7 単元全体の評価

(1) Cと評価した生徒への今後の指導の例

関心・意欲・態度	朗読に関するワークシート(学習プリント⑦)の不足を指摘して記述させ、提出させる。文学作品などは機会あるごとに朗読させるように工夫する。
読む能力	紹介文では生徒が十分に読み取れていない点を指摘して記述させ、提出させる。読み取ったことを自らの言葉で表現する機会を設定するなどの工夫をする。
知識・理解	定期考査に向けてワークシート(学習プリント①)再提出させる。(空欄を習熟度に合わせて調整したワークシートを複数作成し、生徒に選択させる。)

(2) 学習指導の成果

本単元では生徒に紹介文を書かせることを通して作品の内容を読み取らせた。これによって言葉の役割や表現の持つ効果を主体的に考えさせることができた。また、紹介文を相互に評価させながら他者の文章を読ませた。これによって生徒の作品の見方に新たな視点が加わり、考え方や感じ方を深めさせ、多様な朗読をさせることができた。

(3) 改善の視点

紹介文を相互評価する学習活動に予想以上に時間がかかった。今後はさらに少人数に分けるなどの工夫をして活動にかかる時間の短縮を図りたい。また、優れた紹介文を選べないグループが出て授業が停滞しないように、教師があらかじめ選んでおく必要もある。グループ活動に抵抗を示す生徒もいるので、普段から学級内の円滑な人間関係を築くことも大切であろう。

(古宮 才由里)

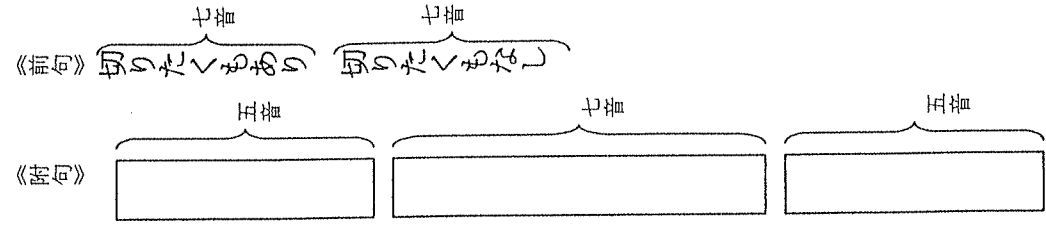
【第3時】

学習活動	指導 (◇) と 評価 (◆) の留意点	評価の実際
○グループごとに紹介文の相互評価を行う。 ○俳句と川柳の紹介文として良いものを一つずつ選び、グループの発表者を決める。 ○グループごとに紹介文を発表する。	◇他者の紹介文を読ませ、自他のとらえ方・感じ方の違いを確認し、作品のイメージを広げさせる。 ◇相互評価表を読んで自分の紹介文の良い点、工夫を要する点を確認させる。(学習プリント⑥) ◇発表はグループごとに俳句と川柳一つずつ、計1	○机間指導を行い、グループ活動に参加する様子や朗読する様子から関心・意欲・態度を観察する。 ○相互評価表(学習プリント⑥)を提出させ、記述内容を確認す

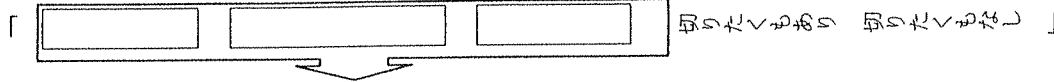
【Aと判断できる生徒の具体例】
●「関心・意欲・態度」
・よりよい朗読をするために、他者の紹介文の良い点に気付いている。
・表現に工夫をし、積極的に朗読しようとしている。

一、江戸時代に流行した『前句附』を実際にやってみよう。

【遊び方】 先に挙げられた音数七・七の「前句」に、音数五・七・五の「附句」を加えて遊びます。



これらを並べかえると、次のような意味の通ったおもしろい短歌になる。



前句附の発者(採点者)「板井川柳」の採点が大変好評だったので、附句だけ独立させたものを彼の名にちなんで() と言うようになった。

二、俳句と川柳の起りを確認しよう。

時代	俳句と川柳が 起こるまで	主な作品名
奈良・大和時代	古代歌謡(天皇から農民に至るまで)	万葉集(和歌)
平安時代	和歌(貴族)	古今和歌集(和歌) 新古今和歌集(和歌) など
鎌倉時代	連歌(上流階級の文芸)	金葉和歌集(和歌) など
室町時代	() が大成したもので、上の句と下の句を別々に詠み、何人がか歌い継いでいく文芸。	菟玖波集(連歌) 新撰菟玖波集(連歌) など
江戸時代	俳諧() が連歌の発句(五・七・五)を独立させ庶民性と清く、雅性を加え、閑寂、高雅な句境を追求。人生を歌い上げ、芸術性が高い。	奥の細道(発句) 譜風柳多留(川柳) など
明治時代	() が、これまでの発句を「俳句」と名付け、写実を説いた。	寒山落木(俳句) など
	前句附 → 川柳 () の名にちなんだもの。遊戯的な趣向が強い。	

一、「俳句」と「川柳」の形式を確認しよう。(五・七・五)の(十七)音。
※ 字数が十七音を超える句を(字余り)と言い、足りない句を(字足らず)と言う。

二(一)俳句(一)

目には青葉 山郭公 初鯉 山口素堂

【鑑賞】 季語() ↓ 季節()
※ ① 季語を収録した書物を()と言う。
② 五・七・五の形式と季語を含む決まりを()と言う。
切れ ※ ① 意味や調子(リズム)のうえで、句が切れることを()と言う。
・初句切れ(第一句で切れる句) ・二句切れ(第二句で切れる句)
・句切れなし(最後まで切れない句) ・※中間切れ(第二句の中間で切れる句)
※ <中間切れの例> やせ蛙 負けるな / 一茶 これにあり
この句は()切れ
② 俳句の意味の切れ目に使う言葉。具体的には、「や」「けり」「かな」「し」「か」「ぞ」「よ」など十八字。作者の感動を盛り込み、句の中心を作る働きをする。これを()と言う。<例> 灯籠にしばらくのころ句いかな

【句意】 目には輝く青葉が映っている。耳では風流な山ほととぎすの声を聞き、舌では新鮮な初鯉を味わうことができる。

【情景】 この句には、「かまくらにて」という前書きがある。視線を外に向ければ目に飛び込んでくる()の濃い緑、耳を澄ませば聞こえてくる()のさえずり、そして昔から有名な鎌倉の味覚である()の味わい。鎌倉の豊かな()が目に見え、舌に伝わる。同じ季節の名詞を並べただけで発句を成立させたもの。青葉とほととぎすは古歌に多く詠まれているが、さらに鎌倉の名物初鯉を加えて挨拶とした。字余りの句。ゆつたりとしたおおらかさを感じられる。

【表現技法】 句の最後を体言(名詞)で止めて余情を出す表現法を()と言う。

(2) 川柳(一)

目に青葉 解凍された 初鯉 村上喬堂

【鑑賞】 季語() だが、川柳は季語を入れるという制約はない。
切れ 初句切れ。(素堂の俳句が基になっているため。)ただし、川柳には通常切れはない。
【句意】 目には輝く青葉を見、舌では解凍された初鯉を味わっている。
【内容】 目に映るのは以前と変わらず輝く()である。しかし、舌で味わっている初鯉は、以前と違って水揚げされた新鮮な鯉ではなく()である。()が発明した「冷凍技術」の便利さが思いがけず句の楽しみを奪うことになった()と、解凍された味が落ちた鯉を甘んじて口に含む滑稽さを感じられる。
【表現技法】 体言止め(素堂の俳句が基になっているため。)川柳は「連用形」や「なり」で止めることが多い。

※ <連用形で止めている例> おつかさん又越すのかと孟子言ひ(「言ふ」の連用形)

課題 友達に紹介文を書いて、作品の持つ味わいを伝えよう。

1 班

俳句 プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ 石田 波郷

【句意】 夜の町中に散歩に出た。街路樹のプラタナスは街の灯を浴びて夜でも鮮やかに鮮やかな緑の葉を輝かひ上げている。まぎれもなく夏がやって来たのだ。

【語句】 プラタナス…… すずかけの木。スズカケ科の落葉高木。樹皮が大きくはげて痕跡を残す。葉は放射状で互生し、秋に鈴に似た丸い実をつける。街路樹に用いられる。

【作者】 石田波郷…… いした はきょう。一九一三(大正二)〜一九六九(昭和四四)愛媛県出身。本名啓大。明治大学文芸部に学ぶ。中学時代から俳句に親しみ、一九一三(昭和一)年、水原秋櫻子に師事、「馬酔木」の編集に従う。一九二八(昭和一三)年「鶴」を創刊し、主筆する。一九三四(昭和九)年、召集を受けて中国へ渡ったが、二年後病氣のため帰国した。はじめはみずみずしい叙情的な句風。のちに理学的な人生観論に移り(人間探求派)の中心となる。晩年は濃濃な古典的句風。句集に『鶴の眼』(昭一四)、『俳句』(昭二五)、『酒中花』(昭四五)などがある。本句は『石田波郷句集』(昭一〇)収録。

川柳 プラタナス都会は狭いなと思ひ 村本 水龍

【句意】 街路樹のプラタナスは、都会は狭いなと思ひながら都会の大通りにそびえ立っているのだろうか。

2 班

俳句 筑して山ほととぎすほしいまゝ 杉田 久女

【句意】 奥深く静かな山中で、ほととぎすが山や谷に木霊を響かせながら、鋭い声で自分の溝呂が行くほど充分に鳴いている。

【語句】 ほととぎす…… ホトトギス科の鳥。小形。背面は暗灰青色で白色横斑があり、腹面は白く黒色横斑がある。初夏、南から渡来してうぐいすなどの巣に卵を産み、育てさせる。「ほととぎす」女人に待たれた風雅な鳥だったが、「山ほととぎす」というと素朴な感じになる。

【作者】 杉田久女…… すぎた ひさじよ。一八九〇(明治二三)〜一九四六(昭和二一)。鹿児島県出身。本名(旧姓)赤堀久子。幼い頃は琉球・台湾で過ごし、その後東京に移る。お茶の水高等女学校卒。結婚後、九州小倉で生活を始める。一九一六(大正五)次兄の勧めで句作を始め、高浜穂積子に師事する。激しい個性を持った天才的な作風が「地の俳人」と称され、注目を引いた。東のかな女、西の久女と言われた。しかし、精神衰弱が高じ、昭和二年に「ホトトギス」を除名される。句集に『杉田久女句集』(昭二六)、『久女遺稿』(昭三五)などがある。本句は『久女文集』(昭四二)収録。

川柳 人間がまた来てるなとほととぎす 風 帆一郎

【句意】 自分の住んでいる静かな森林の中に「人間がまた来てにぎやかにしているな」と思つて見ているほととぎす。

3 班

俳句 ゆるやかに着てひと逢ふ螢の夜 桂 信子

【句意】 ゆるやかに着流して、思いを寄せる男性に遠いに行く。螢の飛び交う夜に。

【作者】 桂 信子…… かつら のぶこ。一九一四(大正三)〜。大阪府出身。本名羽野信子。府立大手前高等女学校卒。一九三五(昭一〇)年頃句作を始め、日野暎子に師事する。その後結婚するが、二年後夫が急逝。初め新進時代のことや夫との死別、戦災等の悲劇の中で生命のいとおしきをみずみずしい感覚で詠んだ。のち女性を強調する作品を作ったが近年は生をより自由な環境で詠んでいる。一九七〇(昭和四五)年、『暎子』を創刊、主筆した。句集に『月光抄』(昭二四)、『新緑』(昭四九)、『初夏』(昭五二)などがある。本句は『月光抄』収録。

川柳 うるたえの螢ににがい水ばかり 堀見 仁江

【句意】 まるでうるたえているかのようにゆらゆらと頼りなく飛んでいる螢。そんな螢が行き着く水辺には苦い水しか流れていない。

課題 友達に紹介文を書いて、作品の持つ味わいを伝えよう。

4 班

俳句 母に手を引かれて遠し蟬の声 北原 白秋

【句意】 遠い昔、幼い頃にカナカナとひぐらし蟬の鳴く中、母親に手を引かれて一緒に歩いたことが懐かしく思い出されてくる。すっかり大人になった今もまたひぐらし蟬の音が聞こえている。

【作者】 北原白秋…… きたはら はくしゅう。一八八五(明治一八)〜一九四二(昭和一七)詩人・歌人。福岡県出身。本名隆昌。早稲田大学卒。早稲田大学入学後の長編詩『全部聖誕の誕』で頭角を現し、二〇代前半に詩集『飛雲』『影ひ出』で大きな評価を得た。異国情緒と羅曼麗にあふれる作風。童謡や小唄など作詞家としても活躍。俳句は一九二六(大正一五)年頃から始めた。自由律俳句も試みている。本句は『竹林清眞』(昭二二)収録。

川柳 木登りを笑つて蟬は枝を替へ 脇田 梅子

【句意】 自分を揶揄しようとして木に登ってくる人間をわざわざ笑うかのようだ。蟬はもう少しというところで、もつと替り枝に飛びまわっていく。

5 班

俳句 やわらかに金魚は網にさからひぬ 中村 汀女

【句意】 緑目の夜、金魚すくいの夜店をのぞいてみた。たらいの中の金魚は、金魚すくいの網からうまくやわらかに身をかわしすすいと泳いでいる。

【作者】 中村汀女…… なかむら ていじよ。一九〇〇(明治三三)〜一九七九(昭和五四)熊本県出身。旧姓藤原。熊本第一高等学校。一八歳の時に詠んだ「高に返り見置す間に寒葉紅し」の句が認められ俳句を始め。一九二〇(大九)年結婚。その後大蔵省官吏の夫に従い、東京、仙台、名古屋、大阪、横浜など各地を転々とした。後子育のために句作を中断するが、一九三二(昭七)年杉田久女の『花衣』創刊を機に句作を再開した。戦後『風花』を創刊し、主筆した。家庭的な日常の中に、深い鋭感性をおびた句を詠み、多くの豪傑婦人を俳句に親しませた。句集に『汀女句抄』(昭一〇)、『藤原紅ふ』(昭五四)などがある。本句は『都鳥』(昭二六)収録。

川柳 悟るまで幾たび鼻をうつ金魚 玉利 三重子

【句意】 あすれはこうなると理解するまで狭い水槽の壁に鼻を打ち付けてはまだ泳ぎ、泳いではまだ壁に鼻をうつけてしまひ……と、同じ失敗を何度か何度も繰り返してしまう金魚。

6 班

俳句 ピストルがプールの硬き面にひびき 山口 誓子

【句意】 水泳競技のスタート時。プールにはられた水面は静まりかえつて波ひとつ立っていない。そんな水面に、始めを知らせるピストル音が響き、同時に競技が始まった。

【作者】 山口誓子…… やまぐち せいし。一九〇一(明治三四)〜一九九四(平成六)京都府出身。本名櫻井古。外祖父に従つて樺太で小学校中学校の大半を送り帰国。東京大学法学部卒。俳句は一九二〇(大九)年、京大三校句会に入つて日野暎子を知る。初めは「ホトトギス」の中核として活躍。その後、水原秋櫻子に共鳴する。水原秋櫻子、阿波野野嶽、高野素十とともに「ホトトギスの四友」と称された。一九四八(昭和二三)年『天樂』を創刊し、主筆する。都市的事象を題材としたり、俳句に知的構成法を導入したりするなど、多くの革新の支持を得た。句集に『暎子』(昭一〇)、『暎星』(昭二〇)、『不動』(昭三〇)などがある。本句は『天樂』(昭一三)収録。

川柳 ダイビング雲もいつしよに見上げられ 原 泰治

【句意】 これからダイビングが始まろうとするジャンパー。それは高いところにあるので、雲は気にもれないことのない雲もダイビングのついでにいつしよに見上げられることだ。

【語句】 ダイビング…… 水泳競技の一種。飛び込み競技。

表現技法

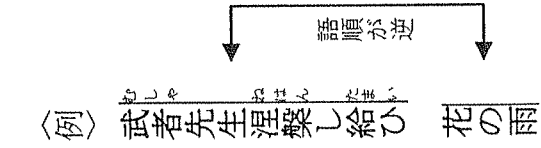
- (1) **体言止め** 結句(最後の句)を体言(名詞)で止めて、余情を出す。
※「余情」とは、あとで心の中に残る情趣。余韻。味わい。
〈例〉外にも出よ触るるばかりに春の月
- (2) **連用中止法** 結句(最後の句)を連用形で止めて、軽い感じや余韻を残す。
〈例〉居酒屋のけんくわかたりの方くおち
- (3) **比喩** あるものにたとえて、イメージを広げたり、印象を強めたりする。

① **直喩(明喩)** ……「このように」「このごとく」という語句を用いてたとえることにより、イメージを広げたり、印象を強めたりする。
〈例〉一枚の餅の^{ごとく}に雪残る

② **隠喩(暗喩)** ……「このように」などを用いず暗にたとえることにより、イメージを広げたり、印象を強めたりする。
〈例〉春を待つ熊野の山は千の牛

③ **擬人法** …… 人でないものを人のようにたとえることにより、イメージを広げたり、印象を強めたりする。
〈例〉春の山弘法の井の^{こぼれ}思づかい

(4) **倒置法** 語順を逆にして、後にくる語句の意味や感動を強める。



(5) **繰り返し** 同じ語句を繰り返して調子(リズム)を整える。
〈例〉松島や ああ松島や 松島や

「俳句と川柳」学習プリント③(俳句) 一年()組()番氏名()

簡条書きにしない。通常の作文のように書くこと。
【俳句】「」()には俳句を記入すること。

【序論】「話題提起」これから述べることを提示する。

【文例】私は「目には青葉 山郭公 初鯉」という俳句を紹介します。(このまま書いてよい)

【本論】「中心の文章」作品の具体的な内容を述べる。【内容】(1)(2)(3)は必ず書くこと。

【内容】(1) 作者について書く。
(2) 句意を書く。
(3) 情景をまとめる。

① 季語(→季節) ※ 季語から季節感が出る。風景を想像しよう。

② 作品から感じた「心の中の風景(情景)」※俳句から感じるあなたの心の中のイメージを書く。

③ 表現技法(→表現効果) ※表現技法のプリントを参考にすること。

【文例】作品に見られる表現技法は体言止めで、読後に余情が感じられます。

【結論】「まとめ」作品に関する感想を述べる。

【視点】作者の感動の中心や表現の工夫など、俳句の良さに触れてあなたの感想をまとめる。

注意事項
十行以上書くこと。

イメージ画

「俳句と川柳」学習プリント④(川柳) 一年()組()番氏名()

簡条書きにしない。通常の作文のように書くこと。
【川柳】「」()には川柳を記入すること。

【序論】「話題提起」これから述べることを提示する。

【文例】私は「目には青葉 解凍された 初鯉」という川柳を紹介します。

【本論】「中心の文章」作品の具体的な内容を述べる。

【内容】(1) 作者について書く。
(2) 句意を書く。
(3) 川柳に込められた内容をまとめる。

① 作品から感じた「深い内容」※作品を通して何を伝えようとしているのかを書く。

② 表現技法(→表現効果)

【結論】「まとめ」作品に関する感想を述べる。

【視点】作品に表現されている皮肉や滑稽さなど、川柳の良さに触れてあなたの感想をまとめる。

注意事項
十行以上書くこと。

イメージ画

- (一) ①～④について、「良い」なら五点、「普通」なら三点、「工夫すると良い」なら一点を記入し、合計点を算出しよう。(特に良い点があった場合は、コメント欄に詳細を記入し、一項目につき一点を追加すること。)
- (二) コメント欄に感想を記入しよう。(良い点や工夫すると良くなるだろうと考えられる点について、具体的に記入する)

一、評価項目	俳句					川柳				
	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	記入者名前	
① 作品について読み手に分かりやすく説明しているか。	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
② 作者の心情や作品の情景(深意)など、イメージが広がるか。	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
③ 表現の特徴や表現技法、その効果について述べているか。	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
④ 作品の持つ味わいが感じられるか。	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
⑤ 総合点	20	20	20	20	20	20	20	20	20	
二、コメント	☆()の中には自分の名前(イニシャルなど)を記入しよう。									
()	(とても分かりやすい内容だったと思います。)									
()	(とても細かく書いてあって良かった。私も情景が想像できました。)									
()	(俳句の静まり返った情景が分かりやすく表現されていました。)									
()	(両方とも作者など詳しく書いてあるから良いと思った。)									
()	()									

「俳句と川柳」学習プリント⑤ (俳句)

一年()組()番氏名()

「俳句」 「ピストルがプールの硬き面にひびき

私は、「ピストルがプールの硬き面にひびき」という俳句を紹介します。

作者は山口馨子という人で京都府出身です。この俳句の句意は「水泳競技のスタート時、プールにはられた水面は静まり返って波ひとつ立っていない。そんな水面に始めを知らせるピストルの音が響き、同時に競技が始まった。」です。この俳句の「プール」という部分から、夏をイメージしました。水泳競技が始まる目撃、会場の観客は全員黙ってプールを見つめています。風も吹かず、波も全く立っていない静かな状態です。緊張感漂う会場内。始めを知らせるピストルの音が静寂の中を突き抜ける感じが伝わりました。「ひびき」という表現は連用形で止めてあります。ピストルの合図でスタートして、その後どうなるのかを読み手に想像させるように余韻が残っているように感じました。

この作品は、水泳競技の緊張感が良く伝わってくる部分が良いと思いました。また、最後の「ひびき」という部分に余韻が残っているのも良いと思いました。

イメージ画

「俳句と川柳」学習プリント⑥ (川柳)

一年()組()番氏名()

「川柳」 「ダイビング雲もいっしょに見上げられ

私は「ダイビング雲もいっしょに見上げられ」という川柳を紹介します。

作者は原泰治という人です。この川柳の句意は、「これからダイビングが始まろうとするジャンプ台、それは高いところにあるので普段は気になれない雲もダイビングのついでに一緒に見上げられることだ。」です。この川柳に出てくる雲は、青くて広い雲の中にもくもくとしてい、客たちは飛び込むとしている選手を見守っています。観客は高いところを見上げます。雲はついでに見上げられるだけでも、雲は脇役でもそこをしっかり存在しています。この川柳の作者はきっと青空に浮かぶ雲が好きで、普段気になれない雲を題材にして、雲の存在を知らせるために川柳にしたのではないかと思います。「見上げられ」という表現は連用形で止めてあります。

この作品の良いところは、雲の存在を強調しているところだと思います。

イメージ画

課題 紹介文を書いた俳句と川柳のうち、好きな作品を一つ選んで朗読しよう。

☆ 次に、朗読の工夫点についてまとめよう。

私の朗読する(俳句・川柳)は、

「ダイビング雲もいつしよに見上げられ」
である。

この句で、私の好きな内容は、

(普段気にされない雲を題材にして人々が見るところ)で、

作品の(二句目、結)句目から読み取ることができる。

だから、(二句目、結)句目の

(作品の〇句目を写す → 雲もいつしよに見上げられ)を

(朗読の工夫を書く → 二句と結句をゆつくりと)読み、

(朗読で表現したいことを書く → 雲の存在が強調されるところ)を表現したい。

工夫の仕方

- ・速く読む。
- ・ゆつくり読む。
- ・強く読む。
- ・弱く読む。
- ・間を取る。

1 単元名

短歌・和歌を読む (8時間中の4時間)

2 本単元のねらいと「年間の指導と評価の計画」上の位置付け

本単元では、前半の4時間で短歌・和歌の読み比べを通してその読みを深め、表現の特色をとらえることをねらいとする。後半の4時間では歌物語を読むことで文章の中での和歌の調べを読み味わい、表現の特色をとらえることをねらいとする。

「年間の指導と評価の計画」の中では、韻文を扱う単元としては、「俳句・川柳を読む」に続くものであり、古典教材(古文)を扱う単元としては「古典の楽しさ」「表現に即して読む」の学習を終えている。また、「人物に注目して読む」「ものの見方や感じ方などに注目して読む」「俳句・川柳を読む」の単元において、読み比べを行っている。本単元では、その中で身に付けた「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」ウ)や「様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」エ)を生かしながら、「文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりする」力(学習指導要領の内容・C「読むこと」イ)をさらに深めていくことを目標とする。

3 単元の目標

- ① 声を出して積極的に読む。(関心・意欲・態度)
- ② 人物・情景・心情などを表現の特色をとらえて読み比べ、読み味わう。(読む能力)
- ③ 短歌・和歌の形式や特徴、表現技法を理解する。(知識・理解)

4 単元の評価規準

- ① 短歌・和歌に関心を持ち、積極的に声に出して読もうとしている。(関心・意欲・態度)
- ② 短歌・和歌の特徴的な表現に即して、人物・情景・心情などを読み取っている。(読む能力)
- ③ 短歌・和歌の形式や特徴、表現技法を理解している。(知識・理解)

5 指導と評価の計画

時	各時間の目標	単元の評価規準	評価方法	学習活動
1	○和歌の修辞・表現技法を学ぶ。	③ (知識・理解)	ワークシートの記述の確認	○文学における、歌の意味を学ぶ。 ○声を出して読む。 ○枕詞・序詞・掛詞・縁語・本歌取り・句切れ・見立て・歌枕といった和歌の修辞や表現技巧を学び、ワークシート(短歌・和歌を読む①【和歌の学習】)に記入する。 ○時代による和歌の変遷について学ぶ。
2	○短歌の形式・表現技	③ (知識・理解)	ワークシ	○声を出して読む。

	法を学ぶ。		トの記述の確認	○短歌の形式や表現技法、近代短歌の流れを学び、ワークシート（短歌・和歌を読む②【短歌の学習】）に記入する。
3	○短歌・和歌を読み比べることを通して、表現に即した読みを深める。	②（読む能力）	行動の観察 ワークシートの記述の確認 鑑賞カードの記述の確認	○恋、季節、親子などテーマを設定して、短歌と和歌を読み比べる。 ○それぞれに見られる共通点と相違点をワークシート（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(1)】）に記入し、発表する。 ○読み比べた短歌と和歌についての鑑賞カード（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(2)】）を作成する。
4	○理解・鑑賞に基づいて朗読する。	①（関心・意欲・態度）	行動の観察 朗読台本・評価表の記述の確認	○理解・鑑賞に基づいて朗読台本（短歌・和歌を読む④【朗読台本の作成】）を作成し、朗読発表の準備をする。 ○朗読を発表し、相互評価をする。

6 各時間の評価と指導の実際

【第1時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際
○文学における、歌の意味を学ぶ。 ○声を出して読む。 ○和歌の修辞や表現技巧を学ぶ。	◇便覧等を参照して、様々な形式の歌があったことを確認する。 ◇枕詞・序詞・掛詞・縁語・本歌取り・句切れ・見立て・歌枕といった和歌の修辞や表現技巧について、例歌を使って確認する。 ◆「和歌の修辞や表現技巧を理解し、例歌について正確に指摘できている。」	○ワークシート（短歌・和歌を読む①【和歌の学習】）を提出

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「知識・理解」和歌の修辞や表現技巧を例歌について正確に指摘でき、ワークシートには講義内容の要点をとらえて記入している。

【Cの生徒への

○時代による和歌の変遷を学ぶ	◇和歌の変遷について、三大和歌集を取り上げて、時代の流れに沿って確認する。
----------------	---------------------------------------

手だての例】
●「知識・理解」ワークシートの記入が不十分な生徒に板書内容を確認させ、記述の不足を補うように指示する。

【第2時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際
○短歌の形式や表現技巧を学ぶ。	◇短歌の形式や表現技巧、近代短歌の流れについて、便覧等を参考にして確認する。 ◆「便覧等を参考にして、歌人系譜やその歌風について理解している。」を判断のよりどころとする。	○ワークシート（短歌・和歌を読む②【短歌の学習】）を提出させ、記述内容を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「知識・理解」短歌の形式や表現技巧、近代短歌の流れを理解し、ワークシートには板書内容に加えて、講義内容の要点をとらえて記入している。

【Cの生徒への手だての例】
●「知識・理解」ワークシートの記入が不十分な生徒に板書内容を確認させ、不足分を補うように指示する。

【第3時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際

○恋、季節、親子などテーマを設定して、短歌と和歌を読み比べる。	◇読み比べにふさわしいテーマを設定する。	○ワークシート（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(1)】）を提出させ、記述内容を確認する。
○短歌と和歌に見られる共通点と相違点をワークシート（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(1)】）に記入し、発表する。	◇個人で考えたあと、グループで話し合う機会を設ける。 ◆「グループで話し合って、短歌と和歌に見られる共通点と相違点を見つけ出している。」を判断のよりどころとする。	○グループ活動に参加する様子を観察する。
○読み比べた短歌と和歌についての鑑賞カード（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(1)】）に記入し、発表する。	◇各自の鑑賞と発表をもとに鑑賞カードを作成する。 ◆「グループでの話し合いを判断のよりどころとする。」	○鑑賞カード（短歌・和歌を読む③【短歌・和歌の読み比べ(1)】）を提出させ、記述内容を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「読む能力」グループ活動に積極的に参加し、話し合いの中で鑑賞を深め、ワークシートの記述に工夫を加えている。

●「読む能力」読み比べの視点を自ら設定し、読みを深めている。

【Cの生徒への手だての例】
●「読む能力」読み比べの視点がうまく見付けられない生徒には、グループの生徒のワークシートを読み比べの参考にさせたり、テーマに基づいたいくつかのポイントを提示したりする。

【第4時】

学習活動	指導(◇)と評価(◆)の留意点	評価の実際
○理解・鑑賞に基づいて朗読台本（短歌・和歌を読む④【朗読台本の作成】）を作成し、朗読発表の準備をする。	◇歌の句切れやリズムに注意する。	

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「関心・意欲・態度」これまでの学習内容をふまえて、読み比べにより深め

○朗読を発表する。	◇意図する朗読の仕方ができていない場合には指導する。 ◆「理解・鑑賞に基づいて、積極的に声を出して朗読している。」を判断のよりどころとする。	○朗読する様子を観察する。 ○朗読台本・評価表（短歌・和歌を読む④【朗読台本の作成】）を提出させ、記述内容を確認する。	た歌の読みを朗読台本に反映するような工夫をし、積極的に朗読に取り組んでいる。
○朗読を聞き、相互評価をする。	◇朗読を聞き、相互評価表に記入する。		【Cの生徒への手だての例】 ●「関心・意欲・態度」朗読台本が作成できない生徒には、これまでのワークシートの見直しをさせ、他の生徒の発表でよかったと思うものを参考にして朗読台本に工夫を加えさせる。

7 単元全体の評価

(1) Cと評価した生徒への今後の指導の例

関心・意欲・態度	朗読台本が未完成の場合は、必要事項を説明し、他の生徒のものも参考にさせながら、完成させるための時間を確保する。 声を出して積極的に読むことを指導し、個に応じた改め時間を確保して朗読させる。
書く能力	読み比べの視点のポイントについて、他の和歌や短歌も取り上げながら説明し、ワークシートを再提出させる。
知識・理解	便覧等の参考資料を提示し、ワークシートを再提出させる。

(2) 学習指導の成果

読み比べをすることにより、現代語と古語それぞれの特徴的な表現をとらえ、その共通点や相違点について考えを深めることができた。また、グループ活動により人物・情景・心情について様々な視点から考え、読み味わうことができた。

(3) 改善の視点

全体的に、ワークシートの内容を精選し、ボリュームダウンをする必要がある。特に、第1時の和歌の修辞や表現技法を学ぶ部分では、ワークシートに内容を盛り込みすぎたため予定より時間がかかってしまった。また、読み比べのテーマについては生徒の興味・関心に基づいて、事前に生徒から意見を聞いてテーマを設定していくことも考えられる。

(松原 志保)

▽み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣打つなり

〔本歌〕み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

- 歌の末尾を() (名詞)で止める方法。
- 余情・余韻を深める。
- () 時代に重んじられた。

〔例歌〕体言止めになっている部分を指摘してみよう。

▽秋ばらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の現代木

▽村雨の露もまだひぬまきの葉に露まらちのぼる秋の夕暮れ

- 結句以外の句で終止すること。一首中に二つの句切れのあるものもある。
- 二句切れ・四句切れは五七調、初句切れ・三句切れは七五調となる。
- ※五七調：荘重で重厚な感じ。『』に多い。
- 七五調：軽快で流麗な感じ。『』以後に主流。
- 句末が終止形・命令形・係り結び・終助詞であれば句切れになる。

〔例歌〕句切れを指摘してみよう。

▽契りきをかたみに袖をしぼりつつ末の松山越えさじとは

▽忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

▽山里は冬ぞさびしきまさりける人目も草もとれぬと思へば

▽わたの原八十あかけて清さ出でぬ人には喜びよ海人の釣舟

▽君がため春の野に出でて若葉摘むわが衣手に雪はふりつつ

- ある事柄を別の事柄としてなぞらえ、たとえる。
- ある事柄を人間の行為や状態に見立てた擬人法。

短歌・和歌を読む①「和歌の学習」

組 番 名前

☆和歌について☆

日本文学のうち、和歌は()を代表するのみでなく、古典文学の中心になるものとして、古来尊重されてきた。物語・日記・随筆・評論などへの影響は大きく、和歌の学習によって、これら他の分野の文学への理解を深めることができる。

〔三大歌集〕

() () ()

☆和歌の修辭☆

- 特定の語句を導き出すために、その前置きとなる修飾語。
- たいてい() (音(仮名五字))からなる。
- 声調を整えたり印象を強めたりする。
- 普通は訳さない。

〔例歌〕枕詞に傍線をつけよう。また、どの言葉にかかる(導き出す)か示してみよう。

▽ちはやぶる神代も聞かずも田川からくれなるに水くくるとは

▽わたの原さき出でてみればひさかたの雲居にまがふ付つ白波

〔ある語句を導き出すために、その前置きとなる修飾語句。〕

● () (音以上)からなり、かなり長いものもある。主として創作による。

● 導き出される語句との結びつきは枕詞のように固定してはいない。

● 意味の関連によるもの(有心)と音の関連によるもの(無心)とがある。

〔例歌〕序詞に傍線をつけよう。

▽あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

▽位の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

〔例歌〕見立てについて考えよう。

▽白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬまぞ振りける
「を」「」に見立てた。

▽小倉山峰のみみぢ茶心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ
「を」「」のある人に見立てた擬人法。

- 和歌にしばしば詠まれる景勝地・土地のこと。
- ※本来は歌を詠むのに用いる言葉(歌語)をいった。
- 特定の連想を呼び起こすはたらきをもつ。

〔例歌〕歌枕を指摘してみよう。

▽徒路あかふ千鳥の鳴く声に或夜寝ざぬ須磨の閑守

- 折句：各句の頭に仮名()の言葉を折り込んで歌を作ること。
- 物名：事物の名を一見してわからぬように取り入れて歌をつくること。

〔例歌〕隠題を指摘してみよう。

▽唐衣きつつなれにしましあればはるばるさぬる孫をしぞ思ふ
「」を折り込んでいる。

▽山鳥みつねに嵐の吹く里はにほひもあへず花ぞ振りける
「」の中に「」を隠している。

- 同音異義語を利用して一つの語に()以上の意味をもたせる(清音・濁音の違いはかまわない)表現。
- 文脈が二重になり、複雑な意味内容を表現する。
- 二重に訳すが、一方が縁語としてだけ機能している場合、そちらは訳さなくてもよい。

〔例歌〕掛詞について説明してみよう。

▽花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに
「ふる」は「」 「と」 「と」の掛詞。
「ながめ」は「」 (眺めやりながら物思いにふけること) 「と」 「と」の掛詞。

▽雑波江の葦のかりねのひとよゆをみをつくしてや悲ひわたるべき
「かりね」は「」 「と」 「と」の掛詞。
「ひとよ」は「」 「と」 「と」の掛詞。
「みをつくし」は「」 「と」 「と」の掛詞。

- 互いに関連の深い語群を意識的に用いる表現。
- 連想によりイメージを豊かにする。
- 掛詞と併用することが多い。

〔例歌〕縁語について説明してみよう。

▽春ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ
「」 「」 「」 「」が縁語。

- ある古歌(本歌)の語句・趣向などを意識的に取り入れて詠む方法。
- 本歌のもつ内容・情趣が歌の表現性を豊かにし、余情を深める。
- () 時代に多く行われた。
- 漢詩・故事・物語をふまえる。

〔例歌〕本歌が取り入れられている部分を指摘してみよう。

▽きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む
〔本歌〕さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫

◎上に挙げたテーマの中から、自分が気に入ったテーマを一つ選んで、読み比べをしよう。

「私が選んだテーマ」

◆なぜこのテーマを選んだのか。

◆短歌の大意

・大意をとらえるうえで注意したところ・工夫したところ

◆和歌の大意

・大意をとらえるうえで注意したところ・工夫したところ

★注意すべき表現技巧

◇短歌と和歌に見られる共通点

◇短歌と和歌に見られる相違点

☆★感想☆☆

短歌・和歌を読む④「朗読台本の作成」

☆自分が選んだテーマの短歌・和歌について、朗読台本を作成し、朗読してみよう。

「私が選んだテーマ」

〈短歌〉

※朗読をするときに注意するところ・工夫するところ

〈和歌〉

※朗読をするときに注意するところ・工夫するところ

★みんなからのアドバイス

☆★朗読を試してみた感想・今後の課題☆☆

「恋の歌（短歌）」②

思いきり……

◎どんな状況でこの歌が詠まれたのか、考えてみよう。

俵万智

短歌・和歌を読む③「短歌・和歌の読み比べ（2）」

組 番 名前

☆短歌・和歌の読み比べをしよう

「テーマ1 恋」

（短歌）

封筒を……

与謝野晶子

（和歌）

黒髪の乱れも知らずうち取せばまづかきやりし人ぞ恋しき

和泉式部

「テーマ2 季節・雪」

（短歌）

君かへす……

北原白秋

（和歌）

君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ

光孝天皇

「テーマ3 動物・千鳥」

（短歌）

しらしらと……

石川啄木

（和歌）

波海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思はゆ

柿本人麻呂

「テーマ4 自然」

（短歌）

最上川……

斎藤茂吉

（和歌）

大海の磯もどろによする波われてくだけてきけて散るかも

源実朝

「テーマ5 親子」

（短歌）

朝に見て……

河野裕子

（和歌）

銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも

源実朝

★和歌①②と短歌①②を読み比べて感じたことを、自由に述べてみよう（受ける印象の違い・歌に込められた思いの共通点や相違点など）。

★①と②の歌を読んで、二つの歌に込められた思いの共通点・相違点について考えてみよう。

●これから短歌と和歌の読み比べて取り上げてみたいテーマについて考えよう。

単元の指導と評価の事例（C 読むこと）

1 単元名

「詩」を読む（5時間）

2 本単元のねらいと「年間の指導と評価の計画」上の位置付け

本単元では詩・漢詩の表現特色をとらえることから読みはじめ、読み比べを通して「詩」の読みを深め、読む能力の向上を目指す。そして単元の学習活動全体を通して、読むことへの関心を高めていくことがねらいとなっている。

本事例は5時間のうち4時間分を2時間ごとに区切り、指導と評価の計画を立て、授業時の活動を示している。これは、指導事項に合ったまとまった時間を確保するためである。

「年間の指導と評価の計画」の中では、韻文を扱う単元として、「俳句・川柳を読む」「短歌・俳句を読む」に続き3単元目である。古典教材（漢文）を扱う点では「古典の楽しみ」「表現に即して読む」の2単元を終えている。どちらの視点からいっても、既習の単元を生かし、「詩」の特色をとらえ、読み味わおうとすることが重要となる単元である。

3 単元の目標

- ① 詩・漢詩の人物・情景・心情に基づいて朗読する。（関心・意欲・態度）
- ② 人物・情景・心情などを表現の特色をとらえて読み味わう。（読む能力）
- ③ 詩・漢詩の形式、表現技法を学ぶ。（知識・理解）

4 単元の評価規準

- ① 詩・漢詩の人物・情景・心情に基づいて朗読をしようとしている。（関心・意欲・態度）
- ② 詩・漢詩の特徴的な表現に即して、人物・情景・心情などを読み取っている。（読む能力）
- ③ 詩・漢詩の形式、表現技法を理解している。（知識・理解）

5 指導と評価の計画

時	各時間の目標	単元の評価規準	評価方法	学習活動
1 2	○詩・漢詩の形式、表現技法を学び、表現の特色をとらえて読み味わう。	③（知識・理解） ②（読む能力）	ワークシート①②の記述の点検・確認	○詩・漢詩の形式、表現技法を学ぶ。 ○漢字の読み、意味を確認する。 ○声を出して読む。（訓読法の確認をする） ○詩・漢詩から感じた人物像・情景・心情などをワークシート①②に記入する。（漢詩は口語訳も記入させる。） ○詩・漢詩から感じた人物像・情

				景・心情などをお互いに出し合い話し合う。 ○「詩」を読み比べる。
3 4	○詩・漢詩の形式、表現技法を学び、表現の特色をとらえて読み味わう。	③（知識・理解） ②（読む能力）	ワークシート③④の記述の点検・確認 鑑賞カードの点検・記述の確認	○詩・漢詩の形式、表現技法を学ぶ。 ○漢字の読み、意味を確認する。 ○声を出して読む。（訓読法の確認をする） ○詩・漢詩から感じた人物像・情景・心情などをワークシート③④に記入する。（漢詩は口語訳も記入させる。） ○「詩」を読み比べる。 ○授業で扱った「詩」から一編を選び、鑑賞カードを作成する。
5	○理解・鑑賞に基づいて朗読する。	①（関心・意欲・態度）	朗読台本の記述の確認 評価表の記述の確認 行動の観察	○朗読台本を作成する。 ○朗読を発表する。 ○朗読を聞き、評価をする。

※（知識・理解）については、定期考査に出題し、その定着状況を確認する。

6 各時間の評価と指導の実際

【第1・2時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際
○詩・漢詩の形式、表現技法を学ぶ。	◇以前に学習した内容を確認し、不足している知識を補うようにする。 ◇教材は、テーマに沿った詩・漢詩を準備し、あわせて提示する。 ◇教材は、読み比べることでそれぞれの読みが深まるものを準備する。	○時間終了後、ワークシートを提出させ、その記述を点検する。 ○単元終了後、ワークシートを提出させ、その記述を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「知識・理解」
・板書事項に加え、講義内容の要点をとらえ、工夫して記入している。

○「鶯のうへ（三好達治）」「春暁（孟浩然）」を声に出して読む。	◆「説明事項が漏れなく記入されている。」を判断のよりどころとする。	◇教師の発声に続けて読ませる。
○「鶯のうへ」「春暁」の語句を確認する。	◇「春暁」については訓読方法を確認、説明する。	◇生徒の状況に応じて、調べさせてもよい。
○「鶯のうへ」「春暁」の表現技法を確認する。	◇反復・7音と5音の音数律・脚韻・句末の連用形・古典的用語の使用についてその効果を考えさせる。（「鶯のうへ」）	◇詩の形式・押韻についてその効果を考えさせる。（「春暁」）
○詩・漢詩から感じた人物像・情景・心情や感想、考えたことをワークシートに記入する。（漢詩は口語訳も記入させる。）	◇机間指導を行い、作業の手順等を理解していない生徒は個別に対応する。 ◆「自分自身の考えをまとめ、記入している。」を判断のよりどころとする。	○時間終了後、ワークシートを提出させ、その記述を点検する。
○他人と自分の詩の読みを交流する。	◇スムーズにグループ活動に移れるよう、あらかじめグループを指定し、リーダーを確認しておく。 ◇グループ活動が進んでいない場合、様子を観察し、助言をする。 ◇生徒に話合いの様子、話合い後の感想を記入させ、活動状況の確認をす	○単元終了後、ワークシートを提出させ、その記述を確認する。

・学習時、自分にとって不足していると思われる点について調べ、記入している。

●「読む能力」
・「詩」の形式、表現技法を理解し、その効果を考察している。
・他者の読みについて考察している。

【Cの生徒への手だての例】
●「知識・理解」
・記述に不足がある生徒に対しては、授業内容を確認、定着させるためワークシートの見本を準備し、筆写させ提出させる。

・書き下し文が書けない生徒に対しては、訓読方法を再確認させる。
・「詩」の形式、表現技法を理解できていない生徒に対しては、再確認させる。

●「読む能力」
・記述が不十分な生徒に記入事項を確認し、記入する

○「詩」を読み比べる。	る。 ◆グループ活動前と活動後の変化を点検する。	よう指導する。
-------------	-----------------------------	---------

【第3・4時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際
○詩・漢詩の形式、表現技法を学ぶ。	◇以前に学習した内容を確認し、不足している知識を補うようにする。 ◇教材は、テーマに沿った詩・漢詩を準備し、あわせて提示する。 ◇教材は、読み比べることでそれぞれの読みが深まるものを準備する。 ◆「説明事項が漏れなく記入されている。」を判断のよりどころとする。	○時間終了後、ワークシートを提出させ、その記述を点検する。 ○単元終了後、ワークシートを提出させ、その記述を確認する。
○「桃夭（詩経）」「祝婚歌（吉野弘）」を声に出して読む。	◇教師の発声に続けて読ませる。 ◇「桃夭（詩経）」については訓読方法を確認、説明する。	
○「桃夭」「祝婚歌」の語句を確認する。	◇生徒の状況に応じて、調べさせてもよい。	
○「桃夭」「祝婚歌」の表現技法を確認	◇詩の形式・押韻（換韻） ・興についてその効果	

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「知識・理解」
・板書事項に加え、講義内容の要点をとらえ、工夫して記入している。
・学習時、自分にとって不足していると思われる点について調べ、記入している。

●「読む能力」
・「詩」の形式、表現技法を理解し、その効果を考察している。

【Cの生徒への手だての例】
●「知識・理解」
・記述に不足があ

する。	を考えさせる。「桃夭」 ◇句末の表現についてその効果を考えさせる。「祝婚歌」	
○授業で扱った「詩」から一編を選び、鑑賞カードを作成する。	◇机間指導を行い、考えの切り口をつかめていない生徒には、近くの生徒と意見交換をさせる。 ◇机間指導を行い、作業の手順等を理解していない生徒は個別に対応する。 ◆学習内容を生かして鑑賞カードを記入しているかを確認する。	○時間終了後、鑑賞カードを提出させ、その記述を点検する。 ○単元終了後、鑑賞カードを提出させ、その記述を確認する。

る生徒に対しては、授業内容を確認、定着させるためワークシートの見本を準備し、筆写させ提出させる。
・書き下し文が書けない生徒に対しては、訓読方法を再確認させる。
・「詩」の形式、表現技法を理解できていない生徒に対しては、再確認させる。

●「読む能力」
・記述が不十分な生徒に記入事項を確認し、記入するよう指導する。

【第5時】

学習活動	指導（◇）と評価（◆）の留意点	評価の実際
○朗読台本を作成する。	◇朗読台本の見本（記号のつけ方）を準備する。 ◇朗読台本の作成方法を確認する。	○朗読台本を提出させ、その記述を確認する。
○朗読を聞き、評価をする。	◇発表者の朗読を評価させることで、自らの学習に対する姿勢を振り返らせ、欠けていたことを気付かせ、身に付けさせる。 ◆生徒の評価表をそのままこの時間の評価とはしな	○評価表を提出させ、その記述を確認する。

【Aと判断できる生徒の具体例】
●「関心・意欲・態度」
・第1、2時の学習を活用し、工夫して朗読台本を作成している。
・「詩」の読みを反映させた工夫ある発表をしようとしている。

	い。	
--	----	--

【Cの生徒への手だての例】
●「関心・意欲・態度」
第1、2時で作成したワークシートの見直しをさせ、朗読台本作成のために助言する。

7 単元全体の評価

(1) Cと評価した生徒への今後の指導の例

関心・意欲・態度	発表台本が未完成の場合は、必要事項を説明し、完成させるための時間を確保する。 評価の根拠を示し、続く単元での積極的な取り組みを促す。
読む能力	他の単元の学習活動を通し継続して指導していく。
知識・理解	本単元で身に付けるべき事項を再度説明する。

(2) 学習指導の成果

中学校で多くの生徒が「春暁」を学んでいた。しかし、訓読法や内容理解など十分でない生徒もいるため、それぞれの学習状況に応じて読みを深めることが出来たと思われる。
また、一単元で4編の「詩」を読むこと（読み比べ）は彼らにとって新鮮だったようで、難解な言葉や表現に苦しみながらも結果的には楽しかったという感想が多い。グループ内での話、「詩」の読み比べを通してそれぞれの「詩」に対する理解を深めさせることが出来たといえる。

(3) 改善の視点

生徒は「鶯のうへ」の言葉を理解するのが最も難しかったようである。5時間という限られた時間の中で力を付けさせるには、若干、教員が平易に感じる教材が適している場合もあると感じた。「春暁」のように以前に多くの生徒が授業で触れている作品や日常生活の中で目に、耳にすることが多い作品など、読み比べの目的を踏まえ、さらに検討してゆきたい。

(廣瀬 愛)

贅のうへ 三好 達治
以下略

●語句●
・贅(いし)：

・この季節を感じた詩の中の言葉は：
・この詩の季節は：
春(桜の咲く頃)

・いつ、どこで、だが、なにをしているか
女学生がお寺の石畳を楽しそうに語らいながら歩いている。
また、同じ寺で作者が一人静かにその様子を見ながら歩いている。

・作者はこの詩を通して何を伝えようとしたと思うか
前半の明るい雰囲気とそれと対照的な後半の暗い静かな雰囲気の対比。
静と動。

●表現上の特徴●
・反復(リフレイン、繰り返し)
何度も出てくる言葉 ↓

効果 ↓

・七音と五音の音数律(漢字をひらがなに直して考える)

効果 ↓

・脚韻
各行の終わりの文字を並べると ↓
母音だけを取り出してみると ↓

・文末に連用形を多用する
文末の単語に注目する ↓

効果 ↓

・古典的な用語の使用(歴史的かなづかいに注目する)

効果 ↓

○表現技法(修辞法)○

・七五調

…七音と五音の組み合わせ。

…音が多い・少ないの組み合わせ。軽妙な響き、流麗さを感じさせる。

・五七調

…五音と七音の組み合わせ。

…音が少ない・多いの組み合わせ。荘重、重厚な極きを感じさせる。

・対句

…類似の構造を持つ二つの句を重ね用いる。
リズムをつくる。

・比喩

…適当な類例や形容を用いる。

直喩(明喩) 「くのように」「くのごとく」を使ってある事柄をたとえて表現する。

隠喩(暗喩) イメージを広げる。印象を強める。
ある事柄を書くことによって本来伝える内容を暗示させる。

擬人法 イメージを広げる。印象を強める。
人間以外のものを人間であるかのように表現する。
イメージを広げる。印象を強める。

・反復

…繰り返す。
リズムをつくる。印象を強める。

・省略

…省く。
想像させる。イメージを広げる。

・倒置

…普通の語順と反対にすること。
印象を強める。

・体言止め

…文末を体言(名詞)で止める。
余情、味わい、余韻を残す。

・連用中止法

…文末を連用形で止める。
リズムをつくる。内容を次へつなげていく。

・押韻

…同一(類似)の音を一定の位置に繰り返し用いる。
頭韻 句の頭の音の響きをそろえる。
リズムをつくる。

・脚韻

句の終わりの音の響きをそろえる。
リズムをつくる。

○漢詩について○

●漢詩の種類●

①近代(きんたい) 詩：押韻・平仄・句数・構成などの面で厳密な制約がある。II詩を作るとき決まり事が多い。
・五言絶句：一句 五字 四句 押韻は 偶数句末

・七言絶句：一句 七字 四句 押韻は 一句末と偶数句末

・五言律詩：一句 五字 八句 押韻は 偶数句末

・七言律詩：一句 七字 八句 押韻は 一句末と偶数句末

・俳律(長律)：律詩の規則に従う。十二句と十六句のものが多いが長編もある。五言俳律が多く、七言俳律は少ない。
十句以上の偶数句。

②古体(こたい) 詩：六朝(りくちよう) 時代(呉・東晋・宋・齊・梁・陳) 以前の詩。近代詩に比べ、制約が少ない。

・四言古詩：一句 四字

・五言古詩：一句 五字

・七言古詩：一句 七字

●漢詩解釈上の注意●
・句の切れ目
五言詩の場合 ○ ○ ○ ○ ○
七言詩の場合 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
一首の構成
絶句の場合：1 起句 2 承句 3 転句 4 結句
律詩の場合：1・2 首聯(しゅれん) 3・4 頷聯(がんれん)
5・6 頸聯(けいれん) 7・8 尾聯(びれん)
※頷聯と頸聯は対句になる。

●表現上の特徴
・形式
一行の文字数…

●書き下し文

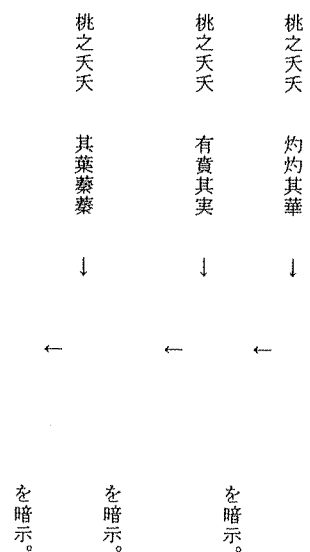
桃天

以下略

- 語句
- ・天天…
- ・灼灼…
- ・之子…
- ・于…
- ・婦…
- ・室家…
- ・賁…
- ・蔡蔡…

・興(きょう)

・押韻



●詩に込められた思い
・作者はこの詩を通して何を伝えようとしたと思うか
「おめでどう」という言葉を「詩」として伝えたのは、その娘の幸せを願って、一つの詩で色んな意味が含まれている方がよりたくさんの「おめでどう」の気持ちが伝わるからじゃないかと思いました。

●この詩を読んだ感想
↓作品のよさ、自分の感じたことなど
「娘」を「桃」に例えていると聞いて、ああ、確かに若々しいイメージがでてくるなあー。と思いました。こんな風に嫁ぐことができたらいいなーと思いました。

「詩」を読む

学習プリント②

年 組

番 ()

()

●書き下し文

春暁 孟浩然

以下略

- 語句
- ・暁…
- ・処処…
- ・夜来…
- ・多少…

●情景をまとめる
↓連想する季節、風景、人物像など
・その季節を感じた詩の中の言葉は…
・この詩の季節は…

春。
ぼかぼかしているような。
いつ、どこで、だれが、なにをしているか
作者が布団の中でねていた。
←
目覚める

・作者はこの詩を通して何を伝えようとしたと思うか
春の日差しがあたたかいところ。
花が嵐で落ちてしまったという傍さ。

●この詩を読んだ感想
↓作品のよさ、自分の感じたことなど
起句はすごく共感した。
最後に花が散ってしまう(と思われる)のがかなしいが、きれいな詩だと思う。

●グループ活動後の感想

●表現上の特徴
・形式

・押韻：句末の響きに注目する。

・倒置：普通の文章と語順の異なる部分を探す。

○選んだ詩○

題名 覽のうへ
作者 三好達治

○選んだ理由○

前から好きだったから。
一番理解できたから。

○詩の分析○

・形式上の特徴とその効果

一行目〜六行目、七行目〜一二行目の前半、後半に分けられる。(前半は明るい、後半は暗い雰囲気)
反復(ながれ、花びら、をみなご) ↓動いているようす

・言葉の印象

古典的仮名遣いを使っている。
色を引き出す言葉：花、春、空、鶯、鶯、影
脚韻

○朗読を通して聞き手に伝えたいこと○

前半と後半の対比
静と動
をみなごの楽しげなところと作者の孤独感

項目	声の出し方	言葉の強弱	間の取り方	読む速度	雰囲気	コメント
	◎	◎	◎	◎	◎	最初の部分から、大きな声を出して、聞きやすかった。スピードも丁度良くとても良いです。
	△	○	◎	◎	○	間の取り方がすごく上手だなと思った。特に「ゆったりゆたかに」の部分が良い。もう少し大きな声で顔を上げれば更に良い。
	△	○	○	○	△	声は少し小さかったけど、スピードが良かった。あとは顔を上げて言うより良いと思う。

「詩」を読む

学習プリント④

年組

番 ()

祝婚歌 吉野弘

以下略

●語句●
うそぶく

●表現上の特徴●

●詩に込められた思い●
・作者はこの詩を通して何を伝えようとしたと思うか
こうした方がいい。ああした方がいい。って色々言っているのは、幸せを願っているからだと思

☆グループ学習の記録☆

年組

番 ()

グループのメンバーの意見、考え、話を聞いて気付いたことをメモしていこう。

「春暁」

●朝起きて作者が感じたこと

↓作者は昨晚の風雨について考えている。

↓風雨が強く木や窓の揺れるような音が一晩中していたと思ったから。
↓作者は花のことについて考えている。

↓昨晚風が強かったから。(たくさん咲いていた花はどうなってしまったんだろうと) 花は桜。春だから。「散る」ってイメージが桜だから。

↓作者は鳥の声に聞き入っている。
↓昨晚は激しい風雨だったのに、もう鳥達が何もなかったかのように鳴き始めている。

●作者は何を伝えようとしていたか

↓風がさった後の静けさ

↓すごい風雨が過ぎて行くと、その次の日とか、すごくキレイに晴れたりするし、その中で鳥の声とか周りのことが聞こえてくると思ったから。

↓風の後のこと

↓風の後の花が心配。
↓毎日が変わりつつある
↓咲いていた花は散ってしまったかもしれないが、嵐の後には鳥達が何事もなかったように鳴いている。

●この詩を読んだ感想●
↓作品のよさ、自分の感じたことなど↓

すごいイイ詩だと思った。この詩をもらった人は、くれた人いっぱい愛されてたんだなあーと思った。

観点別評価の評定への総括の例

1 評価の評定への総括の例の基本的な考え方

学期中の単元ごとに実施した観点別学習状況の評価を、学期末あるいは学年末の評定へと総括することが行われなければ、指導に生きるための評価（指導と評価の一体化）という考え方やその実践も、現実的なものとはなり得ない。そこで、年間の指導と評価の計画に即した単元ごとの観点別評価の評定への総括の方法の一例として、数値化によらないものと、数値化によるものという二つの方法を例示してみたい。なお、ここで示す評定への総括の例は、あくまでも1学期だけ（1学期末）のものであり、1年間を通じてその妥当性などに関する検証は行われていない。

観点別評価の評定への総括の方法については、もちろんここで示しているもの以外にも様々な方法が考えられるが、この例での基本的な考え方としては、学期末や学年末における評価の総括を、それぞれの単元の中の各時の評価規準から直接行うというものではない。つまり、単元ごとに一度総括された評価結果をもとに、最終的に評定への総括を行うものである。同時に、学期末の評価についても、学期中に行われたいくつかの単元の評価を総括しているという点で、学年末の評価の場合と同様に、5段階（「十分満足できると判断されるもののうち、特に程度の高いもの」を5、「十分満足できると判断されるもの」を4、「おおむね満足できると判断されるもの」を3、「努力を要すると判断されるもの」を2、「一層努力を要すると判断されるもの」を1）の評定を用いることとした。

また、定期考査についても、通常の単元と同様の扱いとし、それぞれの観点に対応する問題を作成し、その素点を評価に活用することとした。その際、定期考査では、あくまでも「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の観点と、その観点の学期中の学習の定着状況のみを評価することとした。なお、この例では定期考査を利用して評価しなかった、「関心・意欲・態度」と「話す・聞く能力」についても、他の観点と同様にペーパーテストを用いて評価を行い、その結果を学期末や学年末の評定への総括として活用する方法については、本会の今後の研究の課題であると考えている。

2 数値化によらない評定への総括の例

数値化によらずに評定へと総括する方法とは、それぞれの観点のそれぞれの単元の評価結果の中で、最も多い記号（ABC）がその学期の学習状況を最もよく表しているという考え方に立ったものである。以下の表がその例である。

例えば、「関心・意欲・態度」の観点の1学期間の評価結果では、「A」が6つ、「B」が5つ、「C」がなしとなっている。前述の考え方に立てば、この場合は最も多い記号であるAが、1学期の学習状況を表していると判断し、1学期の評価結果はAとなる。また、「話す・聞く能力」の観点については、「A」と「B」の記号がともに1つずつと同数である。このような場合には、ある単元の観点を、例えば単元に要する時間数などに応じて、軽重を付け（重点化し）て評価するという考え方や、過半数に至らない場合には下位（A→B→Cの順で下位となる）の記号がその学習状況をよく表しているものと判断するなどの考え方がある。ここでは、あえて単元に軽重を付けないという考え方により、「話す・聞く能力」の観点の評価結果をBとした。さらに、「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の各観点については、定期考査における観点ごとの素点を、それぞれ該当する（考査の範囲として既習の）単元の評価規準等に照らして、ABCで評価している。その結果、5つの観点の評価結果から

朗読台本記号

朗読台本

組番（

）

小さな声で
大きな声ではっきりと
ゆっくり読む
速く読む
強く
弱く
間を取らずに続ける
少しの間
長い間
テンポ・リズムに気をつける

私の朗読する（詩・漢詩）は「 贅のうへ」です。
この（詩・漢詩）で私が注目する「 は「 流れるような雰囲気の前半と動きのない後半の対照的なところ」です。
それは「この詩で一番ポイントとなる場所だと思えます」
「流動感」
「を工夫して皆さんに伝えたいと思います。」

総括した、この例の学習者の1学期の評定は「3」となる。

◎数値化によらない評定への総括の例《1学期》

単元名	評価の観点	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
オリエンテーション(1)		B				
聞くことの大切さ		B	B			B
読むことのおもしろさ		A			A	B
言葉の役割を考える		B			A	B
古典の楽しさ		A			B	B
手紙文を書く		A		B		B
伝えるための話し方		A	A			A
叙述に即して読む		B			A	B
表現に即して読む		A			A	A
通知文を書く		B		B		B
様々な本を読む		A				
定期考査(1)				A	B	A
定期考査(2)				B	B	A
評価結果		A	B	B	A	B

評価結果	B	5段階評定	3
------	---	-------	---

数値化によって評定へと総括する方法とは、単元ごとに総括された観点別の評価結果を、例えば「A」は5点といったように数値によって表し、その結果を評定として総括したものである。以下の表がその例であり、上記の数値化によらない評定への総括の例と同じ場合(学習者)を示している。表の各欄の左側の数字が、その単元の観点別の評価を点数化したものとなる。一方、右側の括弧内の数字は、その単元の観点別の評価が「A」とされた場合の点数(満点)を示している。なお、この例には示されていないが、それぞれの単元の観点別の評価が「C」となった場合の点数は「0点」としている。その理由は、「C」という評価が仮にいくつか集まっても、「A」や「B」の1つ分の評価の点数と等価にはなり得ないという理由からである。(仮にCを1点・Bを3点・Aを5点と数値化した場合、Cが3つでBと、Cが5つでAと等価になってしまうことを避けるためである。)

また、定期考査の扱いに関しては、基本的には数値化によらない評定への総括の例と同様であるが、一度観点ごとの問題の素点に対してABCという評価を行い、それをさらに点数化するという方法を用いるのではなく、観点ごとの定期考査での素点をそのまま総括のための点数として活用した。その結果、すべてが「A」と評価された学習者の場合、各単元の観点別学習状況が200点、2回の定期考査の満点の合計がやはり200点、合計400満点となる。そして、学習者それぞれの学習の実現状況の点数に応じて、評価結果の数値を「5」から「1」の評定へと置き換えることになる。この例では、85%(340点)以上の実現状況で「5」、70%(280点)以上の実現状況で「4」、45%(180点)以上の実現状況で「3」、30%(120点)以上の実現状況で「2」、30%(120点)未満の実現状況では「1」という考え方で評定化を行った。その結果、この例で示した学習者の評定は、数値化によらない評定への総括の場合と同様にやはり「3」となる。

なお、この二つの例では、それぞれの単元での学習活動を重視することとし、定期考査とそれ以外の評価の割合を1対1に設定した。しかし、学校や生徒の実態に応じて、その割合を変更することはもちろん可能である。また、「A」や「B」といった評価結果を点数化する場合についても、この例では原則としてBはAの過半数(少数点以下は四捨五入)の点数であるという考え方に立ったが、その割合はもちろんのこと、評価結果の観点別の配点の割合や、「C」という評価に対しても点数を与えるなど、学校や生徒の実態に応じた変更は可能である。

◎数値化による評定への総括の例《1学期》

単元名	評価の観点	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
オリエンテーション(1)		5(10)				
聞くことの大切さ		3(5)	5(10)			3(5)
読むことのおもしろさ		5(5)			10(10)	3(5)
言葉の役割を考える		3(5)			10(10)	3(5)

3 数値化による評定への総括の例

古典の楽しさ	5 (5)			5 (10)	3 (5)
手紙文を書く	5 (5)		5 (10)		3 (5)
伝えるための話し方	5 (5)	10 (10)			5 (5)
叙述に即して読む	3 (5)			10 (10)	3 (5)
表現に即して読む	5 (5)			10 (10)	3 (5)
通知文を書く	3 (5)		5 (10)		3 (5)
様々な本を読む	10 (10)				
各単元の評価結果	52 (65)	15 (20)	10 (20)	45 (50)	29 (45)
定期考査 (1)			12 (15)	20 (50)	25 (35)
定期考査 (2)			6 (15)	20 (50)	28 (35)

評価結果	262 (400)	5段階評定	3
------	-----------	-------	---

4 学年末の評定への総括

学年末の評価の評定への総括についても、ここで示した1学期の評価の総括を、2学期さらには3学期と継続させる(1学期の総括の表に2学期や3学期のものを付け加えていく)方法により実施することができる。つまり、各学期末の評価結果だけをもとにして、学年末の評定とする(例えば各学期の評定を平均するなど)というのではなく、1学期から3学期までの学習活動の評価結果の総括として、5段階の評定へと総括するという方法である。それは、国語科において生徒に身に付けさせたい言語能力とは、あくまでも一年間の学習指導を通じて育成すべきものであるという考え方に立っている。一年間の早い時期には、ある言語能力に関して「C」であると評価した生徒の言語能力が、その後の単元や領域等を超えた指導の継続により、一年間の終盤の時期には、「B」(あるいは「A」)と評価できる状況にまで到達することも可能である(そのような指導を目指さなければならない)という考え方である。そのためには、言語能力を意図的かつ計画的に螺旋状に配置した年間の指導と評価の計画が必要になる。同時に、そのような考え方に基づき指導内容を重点化することで、配当時間も少ないコンパクトな単元づくりも可能になるのである。その結果、評価の付け替えを伴うかたちでの随時の評価についても可能になるのである。

(佐藤 和彦)

これまでの活動について

全体会の実施回数は準備会を入れて23回を数える。全体会は月1回、土曜日に行うことを基本としている。このほかに分科会だけの集まりやワーキングもある。これまでの活動は大きく3期に分けることができる。

- 第1期 第1回～第9回 会の方向性から「年間の指導と評価の計画」の作成。
 第2期 第10回～第13回 各領域の「単元の指導と評価の事例」の作成と検討。東京都の研究成果発表会での発表を目指す。
 第3期 第14回～第23回 全国連東京大会での発表に向けた、「年間の指導と評価の計画」と各領域の「単元の指導と評価の事例」の再検討。

各領域とあるのは言うまでもなく学習指導要領「国語総合」の「内容」の「A 話すこと・聞くこと」・「B 書くこと」・「C 読むこと」の3領域のことである。本会ではこれに「年間の指導と評価の計画」の研究班を加え、14人のメンバーが4つの分科会に分かれて研究を行ってきた。(メンバーについては巻末の名簿を参照されたい。)

- 第1回 平成14年 12月13日(金) [芝大門素材屋]
 ・勉強会の立ち上げについて(準備会)
 第2回 平成15年 1月18日(土) [芝商業高校]
 ・勉強会の方向性と研究テーマについて
 第3回 2月 1日(土) [芝商業高校]
 ・学習指導要領の理解
 ・今後の予定、各領域の分担決め
 第4回 3月15日(土) [芝商業高校]
 ・評価規準の理解
 ・「年間の指導と評価の計画」の書式の検討
 第5回 4月12日(土) [芝商業高校]
 ・領域ごとの「年間の指導と評価の計画」の作成、及び検討
 第6回 5月31日(土) [芝商業高校] //
 第7回 6月21日(土) [城東高校] //
 第8回 7月26日(土) [城東高校]
 ・各領域の「年間の指導と評価の計画」のつき合わせ
 第9回 9月 6日(土) [城東高校]
 ・一本化した「年間の指導と評価の計画」の検討
 ・「単元の指導と評価の事例(指導案)」の作成
 第10回 10月25日(土) [城東高校]
 ・各領域の「単元の指導と評価の事例」の検討
 第11回 11月22日(土) [城東高校] //
 第12回 12月 6日(土) [城東高校] //
 第13回 平成16年 1月10日(土) [城東高校] //
 「研究成果発表会」[青山高校] 平成16年1月23日(金)

国語実践の会 ― フロムT 平成16年度 会員一覧 (五十音順)

	氏名	勤務校	担当
1	雨海 博英	小山台 高等学校	A 話すこと・聞くこと
2	荒木 奈美	八王子北 高等学校	B 書くこと
3	尾崎 肇	調布南 高等学校	年間指導計画・評価
4	鬼塚 里子	国際 高等学校	C 読むこと
5	小泉 清香	富士 高等学校	B 書くこと
6	古宮才由里	拝島 高等学校	C 読むこと
7	佐藤 和彦	千早 高等学校	年間指導計画・評価
8	鈴木 民子	三宅 高等学校	A 話すこと・聞くこと
9	高井 秀実	城東 高等学校	年間指導計画・評価
10	高山 実佐	足立工業 高等学校	C 読むこと
11	高橋 雅子	玉川 高等学校	A 話すこと・聞くこと
12	廣瀬 愛	千早 高等学校	C 読むこと
13	堀川真理子	清瀬東 高等学校	B 書くこと
14	松原 志保	町田 高等学校	C 読むこと

	西辻 正副	文部科学省教育課程教科調査官 国立教育政策研究所教育課程 研究センター教育課程調査官	相談役
	田中 孝一	文部科学省初等中等教育局視学官	顧問

「国語総合」の指導と評価の工夫

2004年10月14日発行

編 著 国語実践の会－フロムT
(全国高等学校国語教育研究連合会事務局)

問合わせ先 東京都江東区大島3-22-1
都立城東高等学校 高井 秀実
電話 03-3637-3561